
魔王さまと始まり

そのたろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王さまと始まり

【Nコード】

N0927L

【作者名】

そのたろ

【あらすじ】

魔王様と愉快的な仲間達

（前書き）

連載にしようと思ってたんです

自由とは素晴らしい。

やはり人間界と国交をもち始めてよかった。なんたって、沢山の書類と仕事から逃げる事が出来るのだから、これ以上幸福なことはない。五十年前までは室内からは逃げられても、城外に出ればすぐに捕まったものである。「魔王さま、どこに行かれるのですか！」などと城を守る兵士だけでなく一般市民までもが血眼で、魔王である私を搜索し、この小さな体のおいばれが見つかった途端に号泣しながら「お戻りください、お城にお戻りください、お願いします、お願いします」と言うのだから溜まったもんじゃなかった。渋々ながらも城に戻れば口うるさい宰相にぐちぐちと責められるのだが、誰かの泣き顔を見るよりは幾分ましだった。本当に、幾分。

私は説教というものが苦手である。そんな私に宰相はよくそれをする。わざとなのかそうでないのかは不明だが、誰かに説得されて不承不承ながらも王室に戻った私の所に壊さんばかりの勢いでドアを開けた宰相が、多分いつも全力で走って来ているのだろう、魔族にしては珍しい銀髪をぼさぼさに爆発させつつも神経質そうにめがねを押し上げたあと毎度、ありがたい説教をしてくれるのだ。

例えば、昨日聞いた長い話はこんなものだった。

「魔王様。尊い立場であるあなた様に宰相である私がこのような事を申すのは大変失礼ではございますが、あなた様はご自分の立場がいかなるものか、もう百年目となるのに、まったく理解しておられない。あなた様はこの国を支える、いいや、この国は魔王様が居られるからこそ成り立っているようなものですよ。」

つまり、いいですか、あなた様が下劣で低俗な考えを持った人間界の生き物に拉致られたとしましょう。その生き物がもし魔王様の

首筋に剣を押し当てながら、人間界に有利な条約や魔界に不利益な交渉をしてきたら？ 我々は何も抵抗できずにそれらを無言で飲まなくてはならないのですよ。そうして飲み込んだら最後、この国は魔界ではなく、人間界の属国となる。仮定の話だとしてもこのような屈辱に耐えられる自信が私にはありません……まあ、魔王様のことですから、このようなことを視野に入れて城を抜け出してぶらぶらしているのでしょうか、しかしですね

宰相の話はそれぐらいとして、魔族は王に対して忠誠心が非常に高い。その王がどれだけ愚直で、国民のことを一切考えていなくても、だ。

とある事情で亡くなるまで父親が今の私と同じ地位に就いていたとき、私は父の後ろから国民の忠誠心とやらを何度も何度も視界に入れる機会があり、そのたびにぞつとしていた記憶がある。彼らの盲目的で恐ろしく従順な態度について理解できなかったのだ。それは今もそうだけでも。

多分……多分、私が人間界を滅ぼせと彼らに命令をすれば、皆は私の喜ぶ顔が見たいがためにはりきって大陸ごと破滅させ、かつ殺した人間の首を笑顔で差し出してくるだろう。そして私が死ねと言えば、彼らは何の疑問も抱かず、狂喜を光らせた刃物、いや自分の爪で腹を掻つ捌き死んでくれるだろう。純真無垢なのかそれとも教育の賜物なのか。ともかく民族性とは恐ろしいものである。

だから、その忠誠心の高さゆえに私が城から逃げ出せばその噂はまさに風のごとく皆の尖った耳……城内の者だけでなく市民にも伝わり総出で、しかも獲物を前にした時のように血走った目を見開けて私を探す。いつかは忘れたけれども、城から逃げ出して魔界で一番きれいと賞されている湖でぼんやりしていたら、いつの間にか五十人くらいの市民に囲まれていて、「魔王さまあ」とおんおん泣かれたことがある。

そうして話は元に戻るわけで

魔界に逃げ場はない、それなら

ば。

と、書類の山と判子を片手に首を傾げて傾げて考え付いた先が、人間界である。

魔界の隣にぶかぶかと浮いている天界は魔族の気配に敏感なうえに、我々に向けられる蔑視が激しいので、もし運良く天界に足を踏み入れられたとしてもその誰かに見つければ、魔王という身分を発揮することなく（むしろ違う意味で効力は発揮されるだろう）脱走を試みた奴隷よろしく捕らえられ、打ち首にされるか宰相が説教で言っていたとおりのことになるだろう。というかまず外交をしていないので魔族が立ち入ることは不可能に近いのだが。

人間界もそうだった。

魔族に対して差別や偏見は目に見えるほど多大にあったけども、それを少なくするだけの優しさと希望もまた同じ程度にあった。

だから私は必死で人間や、人間界について勉強をした。その際、人間を毛嫌にする宰相になにやらぐちぐちと言われていた気がするが、腰まである赤毛のポニーテールが美しいメイド長の応援のほうに記憶に残っている。そして彼女の弟が人間に囚われ実験の道具にされている事実を知った私は、一日に読む本の数を倍に増やし、日々知識を蓄えまくった。

最初、人間界には国交はおろか外交をすることすら拒否されていたが、魔界の治安や教育や食料などの問題をなんとか解決することによってようやく交渉に応じて貰え、かつ、宰相の反対を押し切って人間界と友好条約を結ぶまでに至れた。

その数カ月後にはメイド長の弟を取り戻せもできた。彼の右半身と同位置の顔面には天界のやつらが使用している神字が刺青として彫られており、どうやら魔力を封じる実験をされていたらしい。詳細は聞いていないが、メイド長いわく、拷問に似たようなことをされていたと聞いた。「でも人間のことは恨んでないんですって、どうでもいいって。と、いうよりも魔王様が気に入ってるものを憎めないって感じですかね。っていうか、わたし、思うんですけど、

魔王さまがあいつで実験をしていたやつらをここの法律で裁いてなかったら、あいつ、代わりに関係のない人間をぶっ殺しまくったと思うんですよ。魔王様、人間界と国交を結んでくださってありがとうございます、いやもう本気で」

そして彼女の弟の髪もまた、鮮やかな赤色で美麗だった。

できれば毎日、目に映したいほど美しい色をしていたので護衛として雇ってみたところ、彼は極度の負けず嫌いらしく右半分だけに彫られた刺青をバカにされるたびに強くなり、結果いつの間にか隊長になっていた。（職務として）いつも王室のドアの前に立っているか、仕事をしている私の隣でつまらなそうに鼻くそをほじっている。顔面の半分に彫られた神字を褒めると隊長は怒りもせずに、あきれた顔で溜め息をつくのもいつものことであって、そのいつもをついさつき体験したあと、私は城を抜け出した。行き先はもちろん人間界だ。様々な文書を読み、独力で勉学をした結果、今わたしはこうして人間界の湖をぼけっと見つめることができている。魔王という素性を隠さねばなるまいが、加えて空気はまずいが、少しの自由を得られたのだ、文句は言えまい。

湖の水面をのぞきこめば、先ほど近くの村で出会ったパンを食べながら家の周りをうろついていた人間の子供と似たような顔をした少女が、私を見返していた。もう少し時間が経てば護衛隊長のように背が高くなるだろうか。などと思いつつ、水面に映る子供の両目を見つめる。色は瞳孔も見えないほど真っ黒。髪だってそう。私的なことだが、メイド長のように金色の目がよかった。やれやれ。

「おんぎゃあ」

風に微震する水面を見つめていたら、遠くから何かの鳴き声が聞こえた。小動物のようである。自分の顔を見ていても何も変わらないので、鳴き声の聞こえるほうへ行くことにした。

そういえばこの前はここで狂気にとりつかれた魔族に襲われてい

る人間が居たな。左目をえぐられていたので、仲間の失態として私の目を移植してやったのだが、えぐられていないほうの目の色は緑だったような。人間界では左右の目の色が違うといじめられると聞いたが、大丈夫だろうか……それに、確かあの人間、本に載っていた「神父」という職業の男の服装とそっくりだった。真っ白なマントには血がべつとりだったが。

両目の色が違うこと、魔族に襲われたことが国家レベルでも噂でも問題になっていないところを見ると、あの人間は私にされたことをひた隠しにし、どこかで静かに暮らしているのか。まあいい。

おんぎゃあ！

今はこの鳴き声に集中しよう。

膝ほどにある草や伸び切った木の枝を掻き分けて、鳴き声のする場所へせかせかと小走りで行く　と、枯れかけた草むらの中で小さな図体の割には大きな口を開けてぎゃあぎゃあ叫び声をあげる生き物が居た。

それは人間の赤ん坊だった。

……誰かの忘れ物だろうか。私は静かに赤ん坊に近寄り、抱きかかえてみる。すると、鳴き声がぴたりとやんで、赤ん坊はにつこりふむ。なかなか可愛嬌のあるやつだ。

しかしそれよりも、

「温かい」

魔界の平均的な気温よりもあたたかい体。私は寒さよりもあたたかいほうが好きだった。

そして赤ん坊の顔をよく見ると、髪の毛は獅子のごとく立派な金色で、また、瞳の色は人間界の空の色を移したかのように青かった。赤ん坊は私の顔を見つめてしばらく後に柔らかそうに目を細めた。

とりあえず最初に来た村に帰り、村長らしき翁に赤ん坊が落ちていたこと報告して腕の中にいる可愛嬌のある生き物を見せると、翁は

目をひんむいて、ややあ！　なんてことを！　と叫び声をあげた。
その声につられて、畑仕事をしていた数人の人間がこちらに視線を
向けたのが見ないでもわかった。

翁は震える声で言う。「この国の神官……プラム様が仰ったのだ」
「あの場所に一度だけ供え物を、生贄を捧げればあの森には二度と
魔族は来ないと。なぜなら魔族は人間の肉が好物で」

本当はすべてを否定したかったが、すれば二度とここには来られ
ないので言うのはやめておいた。

「そうですか。それならこの子、あの森に返して来ます」

「ああ……そうしておいてくれ」

赤ん坊の目はあいかわらず柔らかな曲線を描いている。何がそん
なに喜ばしいのだろう。

謎だ。

私はまた森の中を歩く。赤ん坊をまたあの場所に置けば死ぬだろ
う。そんなことを考えながらも足を動かし、赤ん坊をちらりと見や
ると、彼は私の考えを読み取ったのか、ぶさいくに顔を歪ませた。

「おぎゃあ」。ふむ。どうやら死にたくはないらしい。

「生きたいのか」

「おぎゃあ！」

私の言葉に赤ん坊は元気よく返事をした。するとなぜか心地よい
満足感に包まれた。おぎゃあ。この鳴き声が私の尖った耳を優しく
撫でるのだ。未知なる感情である。おぎゃあ。おぎゃあ。ふむ。気
に入った。正直にそう思った。そうして私はあることを思いつき、
右足の裏を地面に強く打ち付ける　瞬間、目に映る景色は森、で
はなく、いつもの見慣れた部屋へと変わり、私は驚く。

魔界の空気に触れても赤ん坊の皮膚は溶けていなかったのだ。

「あれ、魔王様、また人間界に行ってたんですか」

陽気な声に振り返るとメイド長がぞうきんを持って私を見ていた。

どうやら窓ガラスを拭いていたらしい。そして私が抱いているものを不思議そうに見つめて一言。

「っていうか、なんですか、それ」

「人間の赤ん坊だ」

「へえ、人間の赤ん坊！……え、でも、皮膚とけてなくないですか？」

そう、通常の人間にとって魔界の空気は毒であり、触れるだけで皮膚が溶けるのだが、赤ん坊の顔面は相変わらず血色がよいままで零れ落ちそうなふつくらとした頬は瞬きをしても剥がれ落ちることはなかった。

「頑丈なんだろうな」

「頑丈ってレベルじゃないですよ」

「うむ……」

もう一度赤ん坊に視線を落としてなぜ平気なのか、考えようとしたときだった。

「……魔王様？」

私はあることに気づく。

空色に輝く赤ん坊の目は、私の両親を殺害した勇者と呼ばれる人間の目と同じ色をしていた　かと言ってこいつをどうしようとは思わないが。思わないが、である。

さて。

「……どうするかな」

「なにがですか？」

「育て方」

「え」

どうやって赤ん坊を成人にすればいいのか、魔界の王である私には何ひとつわからないのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0927/>

魔王さまと始まり

2010年10月8日14時43分発行